

# 日本発ポップカルチャーを巡って交錯する／せめぎあう境界

——ルポルタージュ「日本マニアの幾つかの肖像」へのコメント分析——

山本 冴里

## 一 問題の設定

近年、移動の日常化や大量化、インターネットで結ばれたネットワークなどによって、「ここ」と「あそこ」を区切る様々な境界が消失しつつあると言われる。赤坂(2002: 13)はこれを、「あらゆる境界の自明性が喪われたようにみえる」「境界が溶けてゆく時代」と描写している。だが、その一方で、境界の前景化・強化も指摘されつつある。たびたび前景化・強化が言われる境界の一つが、国家

という枠組みである。メディアや文化に関しても、「国民文化やナショナルなブランドが相互に認識され、売り出され、消費される」ようになり、「国家もそこに積極的に参与せんと新たなメディア文化の制作・輸出奨励政策を立ち上げ」ていることが、岩淵(2007

2009)等によって論じられている。

現在の日本において、こうした奨励政策の対象となっている「メディア文化」の中心にあるのが、漫画やアニメを中心とするポップカルチャーである。本稿では、アニメ、漫画、ゲーム、JPOPのほか、関連するファッションや食文化<sup>[1]</sup>といった日本発のポップカルチャーの総称として、JPCを用いる。

JPCに対する評価や位置づけは、親子間から社会・国家レベルまで様々な次元での争点となっている<sup>[2]</sup>。また、そのような議論には頻繁にJPCは誰のものか／誰のものであるべきかという線引きの要素が入ってくる。本稿ではそのような状況を鑑み、JPCを巡って交錯する／せめぎあう境界の一端を明らかにしたい。

## 二 本稿の構成

本稿は、以下三段階の構成をとる。まず、JPCを日本政府がどのように位置づけているのかということを記述する。次に例としてフランスのルポルターージュ番組「Plusieurs portraits de Japan-maniae」(日本マニアの幾つかの肖像)における境界の線引きを描く。最後に同ルポルターージュに寄せられた多言語でのコメントを分析し、JPCがどのような枠組みに結び付けられ、JPCを巡ってどのような線引きがあったのかを論じる。

## 三 JPCと日本政府の政策

JPCの国外での人気は一九六〇年代に端を発するが、日本が政府として本格的にその保護・振興に手をつけたのは、二〇〇二年に知的財産戦略会議が開催されてから後のことである。翌二〇〇三年にはその発展的解消の形で、内閣に知的財産戦略本部が設置された。知的財産戦略本部は「内外の社会経済情勢の変化に伴い、我が国産業の国際競争力の強化を図ることの必要性が増大している状況にかんがみ、知的財産の創造、保護及び活用に関する施策を集中的かつ計画的に推進する」ことを目的としている。したがってその課題内

容は、研究開発特許の保護等をも含む全般的なものであったのだが、二〇〇四年の五月には、JPC等に焦点化された「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」が成立した。

二〇一〇年からは、知的財産戦略本部内にコンテンツ強化専門調査会も設置され、同年五月に発表された「知的財産推進計画2010」では、「我が国のポップカルチャーを総合的に発信し、わが国コンテンツ(ママ)と観光やファッションといった他分野を結びつけて波及効果を高めていく」ことが提案されている。「コンテンツ産業」は今や約十一兆円の産業規模(二〇〇一年)を持つ成長産業なのであり、この額は鉄鋼業の約二倍、自動車工業の約半分に相当する。

一方、外務大臣の諮問機関である海外交流審議会も、二〇〇六年からは「我が国の発信力強化のための施策と体制」をテーマとした審議を行っている。中でもその第二回総会において設置が決定されたポップカルチャー専門部会は「諸外国における対日イメージの改善等、わが国の発信力強化のために、外務省としてどのようにポップカルチャーにかかわっていくのが適当であるかを詳細に検討するため」という、本節の問題関心に最も深く関連した目的を持つ。

ポップカルチャー専門部会は、JPCを「一般市民による日常の活動で成立している文化」「庶民が購い、生活の中で使いながら磨くことで成立した文化」であって、これを通して日本人の感性や精神

性など、等身大の日本を伝えることができる文化」であると定義した。<sup>⑩</sup>では、政府が国としてその振興に関わることを正当視する根拠は何か。いわゆるハイカルチャーならば、政府がその保護・振興を行うことはほぼ当然視されている。だがここで問題となっているのは、ポップカルチャーなのである。

前掲部会は、ポップカルチャーの指し示す範囲を拡大することで、これに対応した。すなわち「浮世絵、焼物、茶道などは、其々の時代における当時の「ポップカルチャー」であったがゆえに、たとえば岡倉天心が*The Book of Tea*を書いたのは、ポップカルチャーを紹介する行為であり、「岡倉はこの本を通じ、茶道そのもののみでなく、茶道を通して日本文化の精神性や美意識をも解説し、西洋に広めた」というのである。<sup>⑪</sup>茶道という、現在、一般的にはハイカルチャーとして捉えられがちなものも実はかつてのポップカルチャーで、昨今ならばそれは「アニメ、マンガ、ゲーム、J・POPのほか、ファッションや食文化」に相当する。そういった現代のJPCは「特に新たな時代の流れを切り開く最先端の分野で、広く国民に受け入れられ、強い浸透性と等身大の日本を表す思想性を有するもの」であり、だからこそ岡倉の茶道を海外に紹介するのと同様の根拠で、日本が政府として保護・振興・紹介する対象になるという論理構成である。そうした「ポップカルチャー」をテーマとした文化外交の実施」には、この部会によれば、「我が国に対する支持者

を広げていく上で、高い効果が期待」される。<sup>⑫</sup>

しかし、「ポップカルチャー」をテーマとした文化外交」の実施には、解決すべき問題もあると考えられている。ポップカルチャー専門部会は、「ポップカルチャー」には「日本独自の描写技法等が取り入れられているだけでなく、日本人の感性・考え方に裏打ちされており、これが海外の若者に「Cool」と受け止められ、今や、諸外国の日常に入り込みつつあるところである」ことを高く評価する一方で、「しかし、必ずしもその底流にある日本人の感性・考え方が理解されてはならず（後略）」ということや、「同時に、多くの国で共通の関心を獲得するために、日本的なものが表現されていないことも多」いということを問題視している。<sup>⑬</sup>それゆえに「ポップカルチャーの文化外交における活用」に関する報告」では、「アニメ・マンガへの関心が日本そのものへの関心に高まるような工夫」が提言された。<sup>⑭</sup>

「等身大の日本を表す思想性」「日本独自」「底流にある日本人の感性・考え方」の強調から示されるように、そこでは強烈に「日本」とJPCとが結び付けられている。だからこそ、たとえば「日本的なものが表現されていない」場合にも、それはたとえば、底流に日本的な感性や考え方が無いから、あるいは希薄であるからといった理由から説明されることはなく、「多くの国で共通の関心を獲得するため」であると解釈された。<sup>⑮</sup>

外務省海外交流審議会が、「我が国の発信力強化のための施策と体制——「日本」の理解者とファンを増やすために」として提出した答申（二〇〇八年）においても、JPCを「日本文化全体の中に位置付け、その背後にある日本人の感性・考え方を整理・体系化した上で海外に紹介するよう努め」、「これにより、ポップカルチャーが日本文化の一部として理解され、ポップカルチャーに対する関心の高まりが、自然に日本ないし日本文化に対する関心に結びつくようにする」ことが奨励されている。<sup>(17)</sup>

日本政府は、「発信力強化」に役立ち、なおかつ経済的に高い潜在価値を持つJPCを、日本文化という上位概念に内包される一部として位置付ける。そして、その人気を「「日本」の理解者とファンを増やすため」に利用しようという方策を採る。その流れを推し進めようとするのが、たとえば外務省アニメ文化外交に関する有識者会議委員会メンバーである櫻井孝昌であり、櫻井（2009A）は、「日本はこんなにも好かれている」（156）、「世界はこんなに日本が好きだ」（122）と強調する。櫻井（2009A, B）の議論では、常に国という単位が際立ち、「日本」とJPCに「心から恋して」いる世界中の若者の様子が描かれる。

次章では、フランスにおけるJPC受容の文脈を見ていく。JPCファンの多い国として語られることの多いフランスは、前出の櫻井（2009A）の記述でも、最も多くの量が割かれていた。

#### 四 フランスにおけるJPC受容の文脈

国土交通省総合製作局によれば、中国・台湾・香港では一九六〇年代から漫画の海賊版が出回り、同時期にアメリカでは日本製アニメのテレビ放送が始まっていた。<sup>(18)</sup> フランスの場合、JPC人気が広まったのは一九七〇年代に入ってからになる。一九七八年にテレビ放送が始まった「UFOロボ グレンダイザー」や「キャンディ♥キャンディ」は子供世代の視聴率一〇〇%と言われたほどで、二〇〇二年までは、日本に次いで世界第二の漫画消費国家であった。その後、市場規模では米国のほうが大きくなったが、人口比を考慮に入れると現在も最大市場（日本を除く）であることに変わりはない。

その反面、フランスではJPCに対する反対論や対抗策も強力である。文化省は「UFOロボ グレンダイザー」のヒットを契機としてフランス製のアニメに補助金を投入したし、<sup>(19)</sup> 外国製番組に量的制限を加えるようになったのは、九〇年代の「ドラゴンボール」ブームがきっかけだった。そうしたフランス国内での規制のみならず、EUレベルでも制限（一九八九年のEUの域内文化的価値の保護を目的とした「国境のないテレビ指令」（89/552/EEC 修正指令 97/36/EC））がかけられている。<sup>(21)</sup> 結果として、現在、テレビ放送される作

品のうち少なくとも六〇%はEU域内のものが採用されなければならないし、うち四〇%はフランス語オリジナルでなくてはならない(一九九二年の政令 86-1067)<sup>(22)</sup>

このような規制によって日本発アニメのテレビでの放送枠は大幅に減少しているが、それでも漫画やDVDの売上は増大しているという。日本貿易振興機構市場開拓部(2005:19)によると、これは皮肉にもテレビアニメの放映中止がきっかけとなっているということである。「日本のアニメがテレビから消えたことにより、ファンは日本語のマンガを言葉がわからないながらも読むようになってきた」からだ<sup>(23)</sup>。特に漫画の翻訳点数は非常に多く、二〇〇四年のデータでは、同年内に七五四点の漫画がフランス語訳されている<sup>(24)</sup>。二〇〇九年の同機構のレポートでも、フランスで「伸び続けていたマンガの売上は、二〇〇八年になってやや横ばいになったが、「陰りが見えてきた」といえるほどではな<sup>(25)</sup>とされている。

また、パリでは二〇〇〇年以來、毎年、JPC紹介を中心としたJapan Expoが開かれているが、若者を中心とするその入場者概数は、二〇〇〇年に三千二百人であったのに対して、十年後の二〇〇九年には五十倍以上の一六五、五〇一人にまで増大している<sup>(26)</sup>。本稿執筆時点で直近の二〇一一年Japan Expo入場者数については、まだ正確な数字が発表されていないが、十九万二千人を超えたという<sup>(27)</sup>ことである。主催のSEFA EVENT社は「フランスにおける

日本文化の普及」貢献を理由に、外務大臣賞を受賞した<sup>(28)</sup>。

漫画やアニメを中心とするJPCはまた、社会的な考察の対象となり(たとえばMargret 1999, Bouisson 2006)、知識層に幅広く読まれている月刊誌『ル・モンド・ディプロマティーク』でも、数度に渡って議論された<sup>(29)</sup>。政治家もJPCに言及するようになっていた。たとえば二〇〇七年の大統領選挙で社会党から立候補していたセゴレーヌ・ロワイヤル氏は、議員時代の著書*Le ras-le bol des bébés Zappens*で漫画を低俗かつ暴力的なものとして非難した(Royal 1989)。

二〇〇六年、そんなJPC人気と批判の中で、ルポルターージュ《Plusieurs portraits de Japan-maniac》(日本マニアの幾つかの肖像)がテレビ放送された。以下では、このルポルターージュにおいてJPCがどのような枠組みに結び付けられていたのかを分析する。

##### 五 ルポルターージュ《Plusieurs portraits de Japan-maniac》の内容

ルポルターージュ《Plusieurs portraits de Japan-maniac》(日本マニアの幾つかの肖像)は、二〇〇六年末にフランスの商業テレビM6局から約十七分間にわたって放送された。日曜夜のZone Interditie という情報番組内の放送であり、その内容は、大きく六部に分けられる。

第一部…パリ十五区の比較的裕福な界限。二人の少女が漫画や

日本の芸能人のポスターで壁全面を覆われた部屋で、「Japan Expo」へ出かけるための身支度をしている。十五歳のスイカは

「少女用の髪留め」を挿した髪に緑色のメツシユを入れ「ピンクの豹柄のトップ」を着て、「穴のあいたジーンズ」を穿いている。一歳下の友達シユウは「黒と白のメイド服、高いヒールの靴と白いレースの手袋」を身につける。<sup>(註)</sup>

第二部…家の外へ出て、地下鉄に乗る二人。行き会った人々が二人を見る。

第三部…Japan Expoの会場。大勢の若者がいて「本当の日本人」にも会う。コスプレのコンクールがあり、若者に対してインタビューが行われる。

第四部…なぜアニメ・漫画がこれほどまでに若者達に人気があるのか、ということに関する背景説明がある。

第五部…トゥルーズ郊外の住宅。マリオン（十四歳）が、部屋に飾ってある習字や「日本のメタルバンド」のポスターを見せる。マリオンと、マリオンがコスプレに近い格好をすることを許さ

ない母親との対立が描かれる。母親は「娘を理解する」ためにと、すし屋で「生の魚」を食べる。

第六部…オペラ座界限の日本街。シユウが日本語教室で知り合ったという恋人ユキ（十五歳）と連れ立って歩いている。二人は書店や日本食材店で、日本への気持ちや日本に惹かれる理由について説明する。

なお、ルポルタージュにおいて具体名をもって登場する若者のうちマリオンを除く右掲三人の名前は、彼らが仲間内で名づけた日本名である。シユウは「少女」の「少」に由来し「スイカ」は西瓜、「ユキ」は雪だ。ルポルタージュ内では初登場時に本名も紹介されるものの、その後は日本名で呼ばれ続けるため、本稿でも引用時には日本名を使用する。

ルポルタージュは「ゴシックロリータ」の服を着たパリのシユウに始まり、同じく「ゴシックロリータ」のシユウに終わる円環にある。その内部では、幾つかの明確な対立項が見られる。中心的なものとしては、大人―若者／子供の対立項があり、その上に若者達が設定するフランス―日本／アジアという比較的枠組みが重なる。そのような対立はそれぞれ、JPCと関連づけられたモノや態度に焦点化されていて、大人―若者／子供、フランス―日本／アジア間に

引かれる境界線が際立っている。

## 六 大人―若者／子供という対立項

JPCを巡る大人―若者／子供という対立項は、番組で繰り返し提出されるモチーフである。たとえばスイカの「ピンクの豹柄のトップと、穴のあいたジーンズ」という服装は、彼女にとっては「かわいい」が、母親にとっては「変装」「ピエロ」であって、そのような服装で学校へ行くことは許されない。マリオンは「もっと深く追求して、お気に入りの（日本で出版されている…引用者注）雑誌のモデルと同じ着こなしがしたい」のだが、その母親は「奇抜」「やりすぎ」「賛成できない」と反対した。

このようなJPCへの賛否が個別的な母娘の間での例外的な葛藤としてではなく、ある程度は世代間に普遍性のある対立として提示されていることは、地下鉄で少女達を見て苦笑いをする中年以降の男女へのカメラの焦点化や、このルポルターージュが終わった後の「続いては、同じく親を悩ませるもう一つの流行についてのレポートです」（太字強調は引用者による。以下同様）というアナウンサーの言葉から明らかである。

前出の櫻井（2009B: 147）は、「親の世代が日本アニメで育っている第二世代、第三世代が日本アニメの中心。親にもじゅうぶんな理

解があるわけだ」と書いているが、少なくともこのルポルターージュ内での親世代によるJPCへの評価は、そうした櫻井の説明とは、真っ向から対立する。そのことは表1に詳しく示した。表1には、ルポルターージュ内で日本と直接的に関係づけて説明された物・事柄と、若者・大人の評価がまとめられている。

一方、図1には「ロリータファッション」へのシユウによる意味づけ（上部楕円内）と、ナレーションの説明（下部四角内）をまとめた。

表1および図1から明らかであるように、ルポルターージュ内で日本に関連づけられた物・事柄に対して、若者は一括して肯定的な評価を行っていた。他方、大人は「スシ」に対する「予想外」で「ポジティブな体験」を除けば、JPCや若者による受容のあり方に対して否定的だった。ナレーションは、時には「暗いゴシックと、ロココ時代を思わせる軽やかなレース」といった中立的な解説を加える場合もあったが、「ロリータファッション」を「エキセントリックな格好」と呼ぶなど、基本的には登場する大人寄りの立場をとっていた。

若者達は、「マンガで育った世代」「日本のマンガを読み、アニメを観て、メイド・イン・ジャパンのロックを聴いてきた彼等」「大人になることを拒絶する世代」として表象された。コスプレの舞台と観客が映し出された場面では、「Nous sommes en plein

表1 日本と関係づけられたモノと、若者・大人による評価

日本と関連づけられたモノ		若者の評価		大人の評価
音楽	ロックメタルバンド「かけろう」	これしか聴かない／ルックスも大好き／本当にカッコいい／特に目が素敵	大ファン	「一世代を丸ごと包み込んだ（専門家談として）」
アニメ				
漫画				
Japan Expo		全てが素晴らしい		
日本語	渾名	スイカ（西瓜）／シュウ（少女の「少」）／ユキ（雪）		
	習字	仲間（「一生の友達」と説明）		
	教室	シュウが恋人のユキと知り合った		
服装の流行	染めたメッシュに少女用の髪留め／ピンクの豹柄のトップと穴の開いたジーンズ	KAWAII		奇妙／変装／楽しい変装／ビエロ／不思議なもの／軽蔑／罵り／ショック／悪魔
	黒と白のメイド服／高いヒールの靴と白いレースの手袋			（引用者注：大人に）基本的に嫌な見方をされる／挑発行為のようにとられる／奇抜
	ゴシックロリータ	KAWAII と少しダークな部分が合わさったようなもの		
	スウィートロリータ			
	モデル	夢はできるだけこのモデルに近づくこと		
日本食	スシ			予想外でポジティブな体験
	オニギリ			
	不思議でエキゾチックな品物			
アジア人		本当に素敵／素晴らしい／天使みたい／似たい／アジア人の彼氏が欲しい		
	日本人	（賛成できない他人の好みも）尊重している		

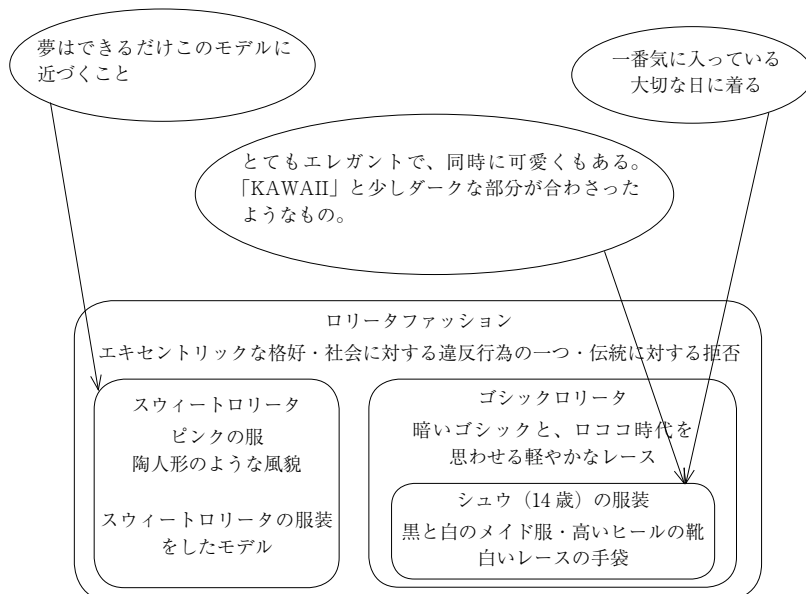


図1 ロリータファッションに関するナレーション（枠内）と、シュウの意味づけ（楕円内）



regression」というナレーションが重なった。後述する日本語字幕版では、このナレーションは「ここでは時間が後退しているかのようです」と訳されているが、むしろ「我々は退行の最中にありま

す」としたほうが良いように思われる。華やかに「変装」し「ピエロ」の格好で舞台の上で踊るといふ行為は、フランスの幼稚園が市民会館などの会場を借りてしばしば行い、お遊戯会に相当するものとして描かれているように見える。

## 七 フランスー日本／アジアという比較枠組み

ルポルタージュ内での、大人ー若者／子供と並ぶもう一つの際立った対立項に、フランスー日本／アジアという比較がある。比較は若者が日本（アジア）を肯定しフランスを否定するという形をとるだけで終わることもあるが、しばしばそこに、若者が肯定的にイメージする日本関連のあれこれを、大人がおおむね否定的に捉えるという構図が重なる。そこでしばしばフランスへの否定は、大人への否定と連動することになる。あるいは反対に、周囲の大人への否定が日本人／アジア人への肯定と対比される場面もある。

以下ではルポルタージュから、そのような場面の幾つかを見ていく。なお、以下の場面抽出におけるやりとりは、ルポルタージュ内ではもちろんフランス語で交わされている。本節では、後述する日

本語字幕版の訳を借用して、日本語でこのやりとりを記す。( ) はカメラが映し出すものを表し、(N) はナレーションを意味する。

例1 身近な大人への否定が日本人への肯定と対比された場。マリ

オン(M)と母親キャシー(K)のやりとり。

(マリオンの部屋の壁に張られた「日本のメタルバンド」のポスター)

M…難癖ばかりつけるのね！

(ポスターや習字の貼られた部屋の壁を回り、ファッション雑誌をめ

くる母娘へ)

K…違う。やりすぎだって言ってるの。

M…そこが良いんだってば。

(N…母娘の苛立ちはまるで目に見えるよう)

K…日本人が全員こんな格好してると思ってるの？

M…違う。でも少なくとも彼等は尊重してるわ。

K…それって…

M…誰かさんと違ってね。

マリオンのいう「彼等」とは「日本人」であり、「日本人」は「誰かさん」すなわち母親と「違って」、他者の服の好みを「尊重してる」という。服の好みを「尊重」してくれない母親への批判が、肯定的なイメージを付与された「日本人」との対比によって強調さ

れている。次例2でも、日本への肯定がフランスへの否定のネガと  
なっている。

例2 日本への肯定がフランスへの否定と対比された例。シユウ

(S) が書店でインタビュアー (I) に答える。

〔N…彼らにとつてここで過ごす時間は現実 (A) から夢見る国 (B)  
への逃避なのです〕

(日本のファッション雑誌が並んだ棚の前。シユウとユキ。シユウは  
雑誌をめくっているが、視線はカメラの斜め横に向かい、質問に答  
えている。カメラの隣にいるのだろうインタビュアーは、映像には  
写っていない)

S…私達が遠く離れた国 (C) にこんなに想いを寄せるのはもう  
我慢できないからよ。

I…現実 (D) 逃避みたいなもの？

S…逃避、その通りね。夢の世界 (E) へのね。だって例えば、  
電車に乗るときなんか完全な上の空よ。イヤホンつけてるし、  
周りに目を向けることはしないわ。私が初めて本当に目を開い  
てお喋りしたり笑ったり出来るのはここに来た時だけなの。こ  
の日本人街に来た時なのよ。私にとってこつちが本当の人生な  
の。ここにいられるのが嬉しいし、自分のいるべき所にいるっ  
て感じが少しするの。

(オペラ座界限の道を歩く二人)

〔N…それでもシユウは日本に行ったことはない〕

〔日本食材店〕に入る二人〕

〔N…彼女が夢見る国 (F) は知らない土地 (G) であり思い描くの  
は崇高なイメージばかり〕

(中略。ユキの東京体験とシユウが日本に「永住」を希望していると  
いう内容)

(棚に並ぶ十六茶のペットボトルから、コンビニエンスストア店内に  
似た店内に立つシユウへと移動)

S…私は結構繊細な方なの。とつてもとつても繊細なの。フラン  
スに戻って大きなショックを受けるのが怖いよ。(中略) も  
し東京に行ったら帰国便になんか乗れないわ。不可能よね。夢  
の国 (H) への切符が手に入ったらそれは片道便でなくてはな  
らないわ。ふらつとフランスに戻ってまたパリの街並みを眺め  
ながら暮らすなんてつらいはずよ。

〔N…少女の意志は固い。来年は東京にいる。その時彼女は十五歳に  
なつたばかり〕

これはフランスへの否定と日本への肯定という対比が際立ってい  
る場面だが、同時にフランス⇔現実、日本⇔夢というイメージも  
重ねられている。引用部分において、日本は「夢見る国」(B・F)

「夢の世界」(E)「夢の国」(H)と表象される。そこは「現実」たるフランス(A・D)から「遠く離れた国」(C)であって、なおかつシユウにとっては「知らない土地」(G)でもある。

「現実」であるフランスの中にも「夢の国」日本の本を扱う書店があり、そこは「自分のいるべき所」と表現されている。そこへ来た時にしか、シユウは「本当に目を開いてお喋りしたり笑ったり」できない。一方、「現実」であるパリの街では、シユウは「完全な上の空」である。シユウは「夢の国」への「永住」を希望し、パリで暮らすことは「つらい」という。

ゆえに、「現実」たるフランスから「夢の国」日本への移動願望や関心の焦点化は「逃避」と表象されることになるのだが、この言葉は、はじめにナレーションによって導入されていることに注目したい。シユウ自身も一度は使用しているが、それはインタビュイーの質問「現実逃避みたいなもの？」に開始されたやりとりの中である。

ここでは、若者の日本への熱狂的な憧れが、フランスの／現実の／大人の社会への拒否の形に重ねられている。ならば大人は、そんな若者にどのように対応するのか。すでにマリオンと母親キャシーの対立を例1に引いたが、次にはルポルタージュ中での、家族でない、他人たる大人全般の反応を見る。

例3 スイカやシユウの服装に対する大人たちの反応(スイカ(SU)が地下鉄でインタビュイー(I)に答える場面)

(苦笑いをしているような中年女性と、振り返って少女たちを見つめた後、向き直って頭を振る六十歳くらいの男性)

〔N…街やメトロの中でも勿論その着こなしは人目を引かずにはすみません〕

(地下鉄の中のスイカとシユウのアップ)

SU…不思議なものでも見るような目つきの人はいるわ。頭のとっぺんから足の先までを軽蔑の目で見る人もいれば、見た瞬間に目をそらすものもある。シヨックのあまりにね。悪く見られると思うわ。罵る人もいる。ゴシツクだつて言いながらね。何度も悪魔つて呼ばれたものよ。<sup>(22)</sup>

前述のように、スイカ自身にとっては、彼女の服装は「かわいい」ものである。しかし大人達が自分達を見るときには「不思議なものでも見るような目つき」に始まり、「軽蔑の目」で見られる。あるいは「シヨックのあまりに」「目をそら」され、「罵」られ、果ては「悪魔つて呼ばれ」るほどに否定されているという。

無論、本人達にとって、その服装は「悪魔」的なものではない。シユウもマリオンも、ルポルタージュの中で「アジア人」への憧れと同一化欲望を直接的に口にしてしている。スイカの場合「似たい」と

言明するシーンは見られないが、彼女もまた「大ファン」であることに変わりはない。そしてそのような憧れや同一化欲望は、本人達にとっては、決して「悪魔」的なものへ魅入られた結果ではなく、むしろその反対の方向性を持っている。

なぜなら、次例4で見られるように、ルポルタージュにおいて「アジア人」は、「天使」のような、良きものとして表象されているのである。「天使」に似ようとしている自分達を、大人は「悪魔」として避け、嫌う——そんな逆説的な物語が構成されている。

例4 「アジア人」が「天使」に例えられた例（シユウ（S）がスイ

カの部屋でインタビュー（I）に答える場面）

（ロリータファッションの少女が空を飛んでいる映像ビデオ）

〔N…シユウの夢はできるだけこのモデルに近づくこと〕

（ベッドに腰掛けている、ゴシックロリータの服装をしたシユウのアップ）

S…私はアジア系の人を過大評価する傾向があるわ。だって彼らのこと本当に素敵だと思うもの。

I…それは美的観点から？

S…そうね。その微笑や話し方、物腰の柔らかさとか……ちよつと天使みたいな……彼らはすばらしいと思う。

I…じゃああなたの理想は似ること。

S…アジア人に似ること。

I…アジア人、日本人にね。

このように若者が日本およびそれが結び付けられた物・事柄を肯定し、大人はそれを否定するか、少なくとも驚きと忌避の感情を持って扱う場面は、ルポルタージュを通して、繰り返し提示された。まとめると、外務省の海外交流審議会がJPCを日本文化という

上位概念に内包される一部として位置付け、なおかつ「ポップカルチャー」をテーマとした文化外交の実施は、我が国に対する支持者を広げていく上で、高い効果が期待される」としていたの<sup>33)</sup>に対して、ルポルタージュでは、大人によるJPCへの反対というイメージが導入されていたことになる。

そしてもう一点、注目されるのが「アジア」カテゴリーの導入である。内閣の知的財産戦略本部の資料においても、外務省の海外交流審議会の資料においても、「日本」を内包するものとしての「アジア」や、「アジア」の一部としての「日本」が言及されることはなかった。つまりJPCの話題に限っていえば、公的資料において「日本」は常に「アジア」から切り離されていた(図2)。

ところが、ルポルタージュにおいては、すでに例4で見たように、漫画やアニメに惹かれる若者が「日本」を肯定するのと同時に「アジア」を称賛する場面が見られる(図3)。そこでは、J

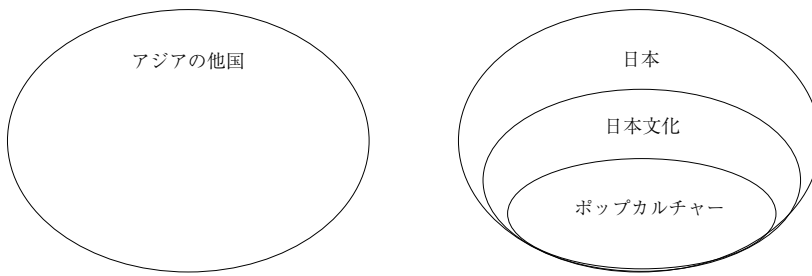


図2 国際交流審議会資料での日本とアジア

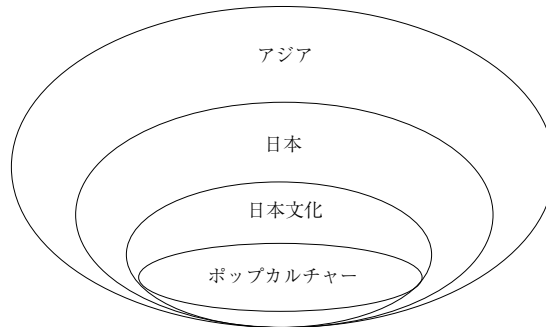


図3 ルポルタージュにおける日本とアジア

PCに焦点化された「日本」への肯定と「アジア」への肯定が、矛盾なく成立していた。

ルポルタージュ内での、この「日本」を内包するものとしての「アジア」カテゴリー導入が、次節で分析するコメント群で、様々な反応と線引きとを触発することになる。

#### 八 コメントデータの概要と特質

ルポルタージュ ※ *Plusieurs portraits de Japan-maniac* ※ (日本マニアの幾つかの肖像) は放送後インターネット上の動画共有サービス YouTube にアップロードされ、後にはそこに日本語の字幕が追加されたバージョンも加わった。二〇一二年六月末現在の YouTube では、オリジナルのフランス語版と日本語字幕版が視聴できる<sup>(23)</sup>。

YouTube に載せられた動画のフランス語版には ※ *Mode Japonaise en France* ※ (フランスでの日本の流行)、日本語版には「フランスのジャパン・マニア」というタイトルが付されている。YouTube にアップロードできる動画は十分程度が限界であることから、いずれも前半・後半に分けられている。分析データとしてコメントを入手した二〇一〇年十月十二日現在での再生回数は、フランス語版・日本語字幕版を合わせればすでに百五十万回を超えてい

表2 コメント数と使用言語

	フランス語版		日本語字幕版		計	
	前半	後半	前半	後半		
コメント	日本語	25	12	252	246	535
	フランス語	121	90	55	31	297
	英語	11	13	178	118	320
	他言語	1	0	2	2	5
	複数言語	21	4	26	32	83
	総数	132	98	455	361	1046

て述べる。本稿で分析対象としたコメントの大半は日本語・フランス語・英語のいずれかで、それぞれコメント数全体の約五一%、約二八%、約三〇%を占めていたが、他に中国語・スペイン語・イタリア語も使用されていた。このようにコメント全体として複数の言語が使用されていたばかりではなく、一コメント内で複数の言語が混在しているというタイプのコメントも約八%（八十三コメント）見られた（表2）。

た。<sup>35</sup>同日時点での再生回数とコメント数は、それぞれ表2の通りである。本節では、その計一〇四六のコメント（有効数<sup>36</sup>）を分析した。

言説分析の対象として、動画共有サイトのコメント群に特徴的であるのは、ほぼ完全な匿名性が維持されている点である。<sup>37</sup>YouTubeの場合には、コメントの横にユーザー名が提示されるため、他のコメント提供者が自分の返事をしたユーザーを名指すこともできるが、そのユーザー名が現実的な社会における実名と同一である可能性は極めて低い。

次にコメントで使用された言語について

コメントのこうした多言語性の理由は、まず、YouTubeというメディアの参加者が世界的な規模を持つことにあるだろう。そこに、フランス語版と日本語字幕版と、二バージョンがアップロードされたことも理由だろう。つまりここでは、フランス語に頼った視聴者には日本語話者というコメントの受容者が想定され、日本語字幕によって理解した視聴者には、フランス語話者というコメントの受容者が想定されることになるからだ。といっても互いの言語でコメントを入れられる人の数はそう多くはあるまい。そこでメッセージを伝えるためのツールとして用いられたのが英語であると考えられる。<sup>38</sup>

## 九 分析

本節では、JPCを巡る言説が「闘争し衝突し、（ルポルタージュの中で）設定された枠組みを変形し、強化し、逆転させる勝負Ⅱゲーム」の詳細を見ていくが、読みやすさを考慮して、次の四点に記述を分ける。すなわち、(1) JPCに対して、どのような意味づけがなされているか。(2) JPCは誰のものか。(3) 「なに人」という名乗りと名乗り要求、(4) 他者否定の言説における使用言語の問題という四点である。

なお、前述の通り、コメントには複数の言語が使用されている。日本語以外の言語が使用されていた場合には、「」で原語コメン

トの後に本稿筆者による日本語訳を付した。(一)はもともと原文内に記されていたものである。コメントの中にはタイプミスや誤用と思われる表現も散見されたが、数が多いためママの記号は付していない。

### 九― JPCに対する意味づけ

左例1は、ルポルタージュ内でのJPCの描かれ方を肯定的に捉えている。登場人物達の「ゴスロリ」の着こなし方を「似合っている」「さまになってる」と褒め、それが「日本の文化」に停滞なく繋がっている。例2も同様で「まじかわいい」と彼女達を褒め、「日本の文化を愛してくれ」たことに感謝し「wo ai ni」(愛してる)、「I love suica et shu」(スイカとシュウが大好き)と、例1と同様に「好き」のおかえしとでも言えるような言葉で締めくくっている。

例1 ゴスロリとかはやっぱ日本人よりフランス人さんの方が似合ってるな。目鼻立ちくつきりだし、足長いし、さまになってる。それにしても日本の文化をこんなに愛してくれて嬉しい♪ 私もフランスが大好きだー！

例2 まじかわいいね！ 日本の文化を愛してくれてありがとう！

wo ai ni「中国語の我爱你…愛してる」I love suica and shu

>>>「スイカとシュウが大好き」

データ中JPCの描かれ方を肯定しているコメントで、なおかつJPCのみに言及しているものは、「かわいい！」などといった一言コメントを除けば、全く見られなかった。二文以上を連ねたコメントでは、JPCは明示的に「日本文化」に内包されるか(例1―2)、あるいは「日本の物」「日本生まれのファッション」「日本のいいもの」と抽象度を高めた形で示されていた(左例3―4)。このようなJPCの扱いは、前述した日本政府によるJPCへの視線と共通する。

例3 昔から世界が認めるデザインとお洒落の国で、日本の物や日本生まれのファッションが一部の人々とはいえ、取り上げられていることに驚いた。基本的に感性の異なる諸外国で評価を貰うことは並大抵のことではなく、認めてもらうことは大変嬉しい。

例4 日本のいいものが高く評価されているってだけでオタクとかは関係ない。何が好きか、趣味かというだけだ(後略)。

一方、ルポルタージュ内でのJPCの描かれ方に反発し、それを

否定的に捉えているコメント例としては、次の例5が挙げられる。ここではルポルタージュに映った雑誌の少女達が「わざと」選択された結果として「目が細い娘」になっていると述べ、それを「白人社会によるアジアに対する偏見」と結びつけている。

例5 途中で日本の雑誌が出てくるけど、わざと目が細い娘のを選んで。こういうのは基本的に目がパッチリした娘を採用する事が多いはずだから、目が細い娘が写ってるのを採すのは苦労したんじゃないかな。白人社会によるアジアに対する偏見は永久に消えないね。

例6もルポルタージュ内でのJPCの描かれ方を否定的に捉えている例ではあるが、「日本人」ではなく「フランス人のロリータ」の立場を取る。

例6 I'm a french lolita too, and Shu is one of my friend. I think this interview show a bad side of french who love japanese culture. The women who're talking laugh at them! We're not stupid, and we're not still child! We just wanna have fun while tree days! While Japan Expo! We're not in "regression" !!!  
\*angry\* (私もフランス人のロリータで、シュウは友達の一入。こ

のインタビュアーは日本好きのフランス人の悪い面を見せていると思う。ナレーターの中の人は笑ってる！ 私達はばかじゃないし、もう子供じゃない！ ジャパンエキスポの三日間、楽しみたいだけ！  
「退行」なんかしていない！！！！\*怒\*

この例6は英語のコメントであるが、最後の regression のみフランス語で記され、引用符をつけた状態で用いられている。これは「Japan Expo」におけるコスプレショーの映像にかぶせられたナレーション「我々は退行の最中にあります」の「退行 (regression)」(本稿六節に前出) に反発した言葉だと考えられる<sup>(1)</sup>。

例5-6は、ルポルタージュ内でのJPC関連描写に否定的であるという点で共通するが、否定的たる理由は異なる。例5では「白人社会によるアジア人に対する偏見」が見られるという理由で否定的なのであり、例6では「日本好きのフランス人」≡「私達」の立場から、ルポルタージュのナレーションにあった、「退行」という言葉に反論している。付言するとフランス語でのコメントには、例6と同様に、ルポルタージュにおける若者達の描き方を批判したものが数多く見られた<sup>(2)</sup>。

むしろJPCを肯定するでも否定するでもなく、単なる一時的現象として捉えたコメントもあった。たとえば例7 (L'aise, ça passera (放っておけ。過ぎていくから)) がそれに相当するが、その



種のコメントの使用言語はフランス語ばかりで、日本語を含む他言語の使用は無かった。<sup>(43)</sup>

## 九― JPCは誰のものか

JPCは誰のものか。ここではJPCの帰属先を巡るコメント群を見ていく。ここでは、JPCを自らが所属すると考える境界線の枠内に引きこもう／そこから追い出そうとする「闘争と衝突」とよって、それらを変形し、強化し、逆転させる勝負「ゲーム」(フーコー 1986:116) が行われていた。JPCの帰属については、既に前掲例の中にも記述があつて、たとえば「日本の文化」(例1―2)、「日本のいいもの」(例4) などというコメントにおいては、JPCは「日本」に帰属し、肯定的な評価をされている。このような見方は三節で分析した外務省海外交流審議会の姿勢と一致する。

しかし、コメント全体を通してみれば、JPCは必ずしも「日本のいいもの」としてあつたわけではない。以下では、まずJPCと「日本」を巡る線引きのせめぎあいについてまとめ、その上で、そこに「アジア」カテゴリーが入ってきた場合を扱う。

例8の「私は日本人」と自己設定するコメント提供者にとつては、番組内で提示されたようなJPCは「日本の文化」の枠組み内に入るとはいえ「愚か」な部分であり、「癌」に例えられる。ここではコメント提供者は「恥ずかしさ」を感じてしまうという。

例8 this is like cancer from japan. i am japanese and ashamed of japanese stupid culture spreading out all over the world. please don't misunderstand japanese. only a few young people likes that style in japan. all of japanese doesn't like it and despise. if you are intrested in japanese shameful style, you should stop it. poor english sorry. (これは日本から発した癌みたいなもの。私は日本人で、日本の愚かな文化が世界中に広がっているのを恥ずかしく思っている。日本人を誤解しないでください。日本であんな格好をしている若者はごく僅かです。日本人がみんなそんな格好を好きだというわけじゃなくてむしろ軽蔑しています。もし日本のそんな恥ずかしい格好に興味を持っているのなら、やめるべきです。下手な英語でごめんなさい。)

同様に次例9も、JPCが「日本」に内包されているものと捉えているが、「いいもの」などという肯定的な意味づけは行っていない。それどころかJPCは「現実逃避できる日本のオタカルチャー」という言葉で表されている。例9のコメント提供者にとつて、「オタク」は「オタ公」という蔑称で表すべき対象なのである。

例9 日本が好きなのではなく、現実逃避できる日本のオタカルチャーが好きなのだろうよ。いやだよねえ、オタ公は。

以上、JPCが「日本」に内包されているという点では共通するものでありながら、それを肯定的に捉えるか（例1-4、図4）否定的に捉えるか（例8-9、図5）という点で異なるコメント群を見てきた。

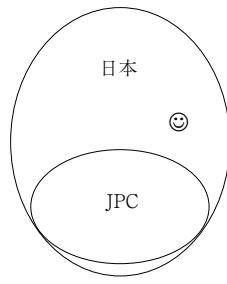


図4 PC ∈ 日本 ☺

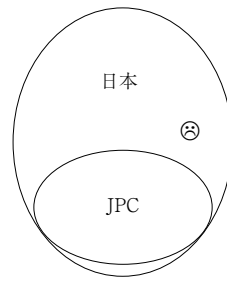


図5 PC ∈ 日本 ☹

次に、JPCを「日本」から切り離そうとする方向性を持つコメントを見ていく。そこにもまた二種が見られ、一種はJPCを「本当の日本文化」ではないとした図6のようなもの、もう一種はJPCを「日本」だけのものにしておく必要などないという図7のタイプのコメントである。

図6のように、JPCを「本当の日本文化」から切り離そうとする方向性のコメントとして、下例10-13を挙げる。

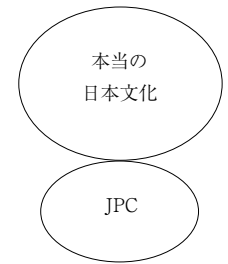


図6 PC ≠ 本当の日本文化

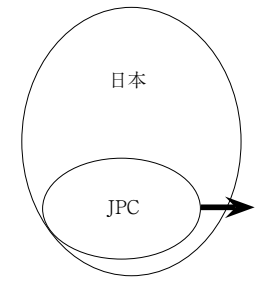


図7 切り離し

例10 ああフランス人は本当の日本を知らない。くだらんね〜。

例11 日本の文化を愛してくれるのは嬉しいけど、彼女が好きなのは彼女の中の憧れの存在の日本で、本当の日本じゃない。悲しいけどきつと日本にきたら幻滅してしまうだろう。サブカルチャーは日本人にとっても桃源郷なんだから。でもそのほうがいいんだろうな。

例12 パリの風景を再び見るなんてやってられないか：日本⇨秋葉原、秋葉原に行く↓「日本最高」この考え方ほんとやめて欲しい。  
*Je n'aime pas que le chose gen parlent du japon seulement base sur otaku culture. je leur veux savoir le vrai japon.* [日本をオタク文化だけで語らないでほしい。本当の日本を知ってほしい。]

例13 Ce que je critique c'est que ces jeunes s'imaginent un Japon qui n'est pas le vrai... Genre j'adore le Japon mais je connais même pas le nom de l'empereur ou le nombre d'habitants... C'est ça qui est risible en fait... [自分が批判しているのは、この若者達が、本当じゃない日本を想像しているからだ。日本が好きだけど、天皇の名前も人口も知らないっていうようなやつ。お笑いだよね。]

例10-13のコメントは、ルポルタージュの中で少女達が懂れる日本を「本当じゃない」ものとしているが、かといって「本当の日本」とはどのようなものなのかということについて、言及しているわけでもない。例13は「日本が好きだけど、天皇の名前も人口も知らない」「若者達」に対して、「本当じゃない日本」を想像している  
と非難するが、「天皇の名前」や「人口」といった知識を重ねていけば、どの程度で「本当の日本」を知ったことになるというのだろう。そういった問いに答えるのはほとんど不可能だ。

最後に、JPCと「日本」との境界線の引き方として、図7のタイプのコメントを引用する。例14のコメント提供者にとって、「流行は国に所属するものじゃない」のだから、ルポルタージュで紹介されたようなJPC＝「日本の流行」を、「日本人だけのもの」にしておくのは「ばかみたい」な行為となる。

例14 Maintenant, je trouve idiot de dire qu'il faut laisser la mode Japonaise au Japonais. Parce qu'une mode n'appartient pas à un pays. On retrouve par exemple le Punk partout et personne ne dit rien la dessus alors qu'il a trouvé ses origines à Londres. (Non ?) Ici, l'origine, c'est Tokyo. Et ce qu'il y ait beaucoup de Japonais(es) ou non qui se fringent comme ça la bas, [日本の流行を日本人だけのものにしておかないと言うなんて、ばかみたいだと思う。流行は国に所属するものじゃないから。たとえばパンクはどこにでも見られるけれど、それについては誰も文句を言わない。もともとはロンドン発祥だっていうのにね(違う?) この場合、発祥は東京だ。だから東京には多かれ少なかれ、こういう格好をしている人がいる。]

こうしたJPCと「日本」を巡る境界線の線引きは、そこに「アジア」という要素が入ってきたとき、更に複雑なものとなる。ルポルタージュ内では、「アジア」は「日本」を包含するものとしてあり、「アジア」が好きであることと、「日本」が好きであることは、矛盾していなかった。少女達は「日本」のポップカルチャーのファンであり、同時に／だからこそ「アジア人」に惹かれているものとして、描かれていた(図3)。

しかしコメントでは、この「アジア」に包摂されている「日本」、

「日本」を包摂する「アジア」というイメージに対抗し、それを變形し異なる関係を打ちたてようとする言葉遣いが多数見られた。まず、例15―16は、そのようなイメージに対して、代替イメージをこそ提出しないものの、「違和」感を表明しているコメントである。

例15 「アジア」で一括りにされると違和感を覚えるのは何でだろ（、・・」ε・、）？ 私達は普段、自分達をあまり「アジア」だと意識してないんだよね。笑（後略）

例16 アジア系で全てヒトククリニサレルンダヨwww<sup>45</sup>

一方、例17は、ルポルタージュ内の若者達が「日本」とそれを包摂する「アジア」に対して「好印象」を持つていたことを「嬉しい」という。このコメントにおいて日本がアジアに包摂されているという関係は肯定されているが、このようなコメントは、日本語で書かれたものとしては、この一点しか見られなかった。反対に例18のコメントは、「日本≠アジア（日本はアジアではない）」と主張している。

例17 アジア：特に日本について好印象を持っている事は嬉しい。

例18 日本はアジアじゃないぜ。そこんこ理解してないフランス人はやっぱアホや。They confuse Japanese and Asian. After all, French are racists. [日本とアジアを混同して。結局、フランス人は人種主義者だ。]

さらには、日本がアジアに内包されていると認めつつも、「アジア」内の他国を挙げて否定的な意味づけを行い、「日本」あるいは「日本人」は当該他国・他国人とは異なるということを主張しているコメント（例19―21）も寄せられている。なお、以下、本例に限らず差別的・否定的な意味合いで用いられている日本以外の国名は、拍数にかかわらず×××と伏した。文脈から×××の指し示すところはある程度推測でき、実質的に隠すことにはならないかもしれないが、これは基本的な姿勢の問題でもあると考えるため、実際に用いられていた国名は明記しない。なお、学問的分析対象として差別的・侮蔑的表現に言及することに關する本稿筆者の考え方は、九―三項に後述した。

例19 スイカちゃんかわいい。アジア系でも×××人・×××人は下等民族なので混同しないようにね。×××人・×××人とかわかるとロクなことがないので注意してね。

例20 アジア系＝日本ですね。×××国などとは一緒にしてほしくありませんね。日本文化をこんなにもほめてくれるとうれしいですね！

例21 A xxx and a xxx are not gentle like a Japanese. Though it is the same Asian, character is totally different. [×××人や×××人は日本人みたいに優しくないよ。同じアジア人だけど性格は全然違う。]

次例22は、アジアの他国が「日本の文化をアジアの文化と化し、利用し割りこむ」ことに対して不満を述べている。これは例18と同様に日本をアジアの外に置こうとするコメントだと解釈することもできるが、そうではなく、「日本」のものを、それを内包する「アジア」全体のものとするこへの反発と受け取ることも可能だろう。ここでの「日本の文化」が具体的に意味しているものがJPCであることは文脈から明らかだ。その点からいえば、これはJPCの争奪戦に参加しているコメントなのである。

例22 世界のJapan expoなどに×××国企業がスポンサーとなり、×××・ジャパンエキスポにしりとクソどもが妨害してます。日本の文化をアジアの文化と化し、利用し割りこもうとしてま

す。もっと怒りましょう。

コメント群におけるこの種の争奪戦は、漫画やアニメ、衣装のみを巡って行われていたわけではない。ルポルタージュ内でマリオンという「日本文化のあらゆる側面に向ける情熱」を持った少女が、母親・弟とともに「日本食レストラン」を訪れ、寿司を食べる場面がある。そこでは甚平のようなものを着た板前が、二人同時に寿司を盛った皿を出すのだが、うち一人は日の丸の鉢巻を巻き、赤い丸の両側には「日」と「本」が漢字で書いてあった。この「日本食レストラン」に対しても、幾つかのコメントが提出されている。

例23 注意して欲しいのは日本ブームに乗って、無数のまがい物がでていくことですかね。きつかけとしてはいいかもしれないけど、あの日本食レストランも日本人経営ではなく、×××国か×××系のアジア人っていう感じを受けた。最初はそれでもいいけど、できるだけ偽物はやめた方がいいかな。

例24 Elle mange dans un faux resto japonais. [偽の日本食レストランで食べる。]

例25 I just hate to see fake Japanese restaurants. God!! Those

fakey are often operated by xxx or xxx. [偽の日本食レストランを見るのは嫌いだ！ もう！ こんな偽の店は、だいたい×××人が×××人が経営してるんだ。]

例26 yeah im agree this restaurant is xxx i think. [ネーだよ。このレストランって、×××国のだと思っ。]

例27 Nice report. This is really interesting. Let me point out one thing. The sushi is fake one by xxx or xxx. We, Japanese are always puzzled by their fake Japanese foods restaurant abroad. [いいレポートだ。すっく興味深い。一点指摘させてほしい。あの寿司は×××国人か×××国人が作った偽物だ。我々日本人はいつも、海外の偽の日本食には当惑してる。]

ルポルターージュに映し出されたレストランが、実際のところ、誰によって経営されているのかということはわからない。「日本人」かもしれないし、そうでないかもしれない。だが、いずれにせよ「種」のコメントに共通するのは、「日本人」の経営ではない「日本食レストラン」を、「偽」「まがい物」とする意識である。そもそも、「日本人」を揃えなければ、「本物」の「日本食レストラン」は経営できないとする、こうしたコメントの中では、「日本」―「日本人」

―「日本食」が透き間なく密着している。

一方、例28―30のコメントは「アジア」に含まれる他国を否定的に意味づけている点で例19―21と共通するが、例19―21と違って、「日本」あるいは「日本人」は他国・他国人とは異なるということを主張するに留まらない。例28―30は、例19―21よりもさらに先鋭化して、当該他国・他国人を「アジア」から排斥しようとしたコメントである。

例28 西洋人が喜ぶのも嬉しいが、アジアに少しでも希望を与えられる国であって欲しい。×××はアジアじゃないからな。言っとくけど…

例29 You are right. xxx are shame part of Asia. Let's kick out them from Asia. [その通り。×××はアジアの恥だ。アジアから追い出そうぜ。]

例30 My friend from xxx also hate xxx. I was no wonder why. Coz they are the disease of Asia. We need to get rid of it. [×××から来ている友達も、×××が嫌いだ。不思議はないね。アジアの病巣だからだ。排除しなきゃね。]

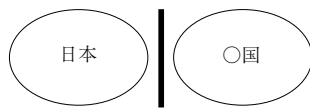


図8 分断

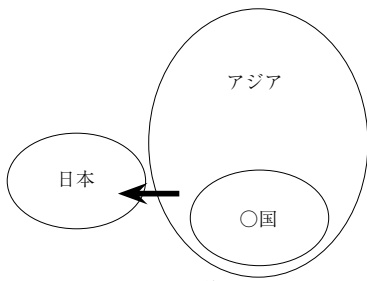


図9 脱出

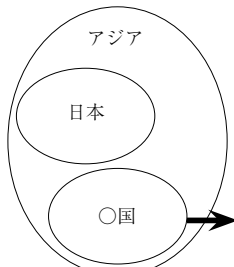


図10 排除

以上より、「アジア」の中の特定少数の他国に否定的表象を付し、「日本」と差別化する(図8)という点では共通するコメントであつても、その内部では二種に分かれていたことが指摘できる。すなわち「日本」をアジアから切り離すようなアジア脱出タイプのものと(図9)、反対にこの特定少数の他国を「アジアではない」として、「アジア」からの排除を志向する方向のコメント(図10)である。

このようなアジアと日本、アジア内の他国を巡る境界線の闘争は、しかし、ルポルタージュ内でのアジアと日本の描き方(図3)とは、かなり趣を異にする。ルポルタージュ内では、JPCは日本のみに結びつけられてはいたが、日本はアジアの対立項ではなく、アジアという概念に何の衝突もなく内包されるものだったからだ。

ところで、インターネット上でこのように非難や批判、誹謗中傷を含むメッセージが大量に寄せられる現象は、フレイミング或いは炎上と呼ばれる。この現象を「規範」という概念を用いて分析した平井(2007)は、「(そこで)焦点化される規範は、日常生活の場面で適用される「道具」や「マナー」といった類とは性質を異にする」、「ブログ炎上で優先される「規範」は、インターネット・コミュニケーションにおける特定の状況においてのみ援用される」ことを強調している。ルポルタージュ番組の製作者は、もちろん、視聴者間の論争においてアジアと日本の関係が争点になるなどとは、予想しなかったことだろう。平井(2007)の議論を敷衍しつつ述べると、ここでは、日本はアジアに内包されているという関係を当然視するという(日常生活場面で適用されるにあたっては問題にならない)「規範」が、不特定多数の他者の目に触れた際、そのうち当該「規範」を共有しない人との「ミス・コミュニケーション」となり、それが「炎上」へと発展したということになるはずだ。

実は、日本アニメは「決して純粹に日本の生産物ではなく、いろいろな意味でさまざまな文化のハイブリッドな生産物」である(毛利2009: 73)。同じく毛利(2009: 75)によれば、「制作コストを抑えるための人件費の安いアジア諸国への動画制作外注は、すでに一九六七年から始まっていたという。JPCは、実は日本ブランドをつけた *made in Asia* の製品なのである。外務省の喧伝する国家

主義的な「クール・ジャパン」は、イメージ戦略としては有効かもしれないが、実態にはそぐわないことになる。JPCのハイブリッド性は制作の段階にとどまらず、ローカルな普及の段階において多様なアクターが関与していることが、Tohin (2004)、Black et al. (2007) などによって明らかにされている。

### 九—三 「なに人です」という名乗りと名乗り要求

コメントの中でJPCを巡って、いわば争奪戦とも言えそうな線引き合戦が起こっていたことは前出の通りである。ここでは特に、その線引き合戦と「なに人」との関わりを考えていきたい。というのも、その線引き合戦がとりわけ卑しく、かつ刺激的な用語を武器として行われるとき、実に頻繁に「なに人」という名乗りがあり、「なに人ですか」という要求が提出されていたからである。そこでは異なる意見を持つ人間への否定が、否定的表象を付された民族集団へと結び付けられたり、容易にその人が所属する「なに人」への全否定と燃え広がったりしている様子が見られた。

平井 (2007) は、伊地知 (2007) によるブログ炎上を招くようなメッセージの分類を、①反社会的行為の吹聴、②評価が曖昧な社会的争点について意見を述べる、③特定の対象への誹謗中傷、④企業のPRと結びついた「やらせブログ」という表現でまとめた。本稿で分析したのはYouTubeでのコメントであってブログではな

いが、基本的な炎上の枠組みは変わらない。JPCの価値は、あるいは日本がアジアの一部であるか否かという問題は、ここでは②の意味合いを持っていると考えられる。本稿筆者は、②を理由とする炎上が、「なに人」という枠組みに結びつき、その「なに人」が③の「特定の対象」となって、②と③とが相乗的に作用したのだ、と解釈している。

なお、差別的・侮蔑的言辞は、たやすく感情におかされやすく、サーバースペースの「炎上」<sup>(46)</sup>を扱った文書で論じられるように、野火のように燃え広がる。学問的分析対象として差別的・侮蔑的表現に言及する本稿も、その意図に反して、その種の表現の流通に加担してしまうことは認めなければならない。バトラー (2004: 23) は、これを「不適切な言葉づかいについて議論する法的発言の文脈で、不適切な言葉づかいがつねに増殖しているのである。(中略) 憎悪発言を批判し法的に禁止しようとする言説それ自体も、憎悪発言のパフォーマンスの再演となる」とまとめている。田中 (2001: 20) もまた、「これこれの語はサベツ語だというのは、特別な知識が入用になる。そして、これはサベツ語なんだぞと教える人がいなければならぬ。このように、教育によって、いいかえれば入れ知恵によって、サベツ語がどんどん増えるという、病的な現象が生ずる」ことを指摘している。<sup>(47)</sup>

本稿筆者は、バトラー (2004: 前掲) や田中 (2001: 前掲) の主張



にならずきつつ、なお議論を続けたい。筆者は、第二言語・外語教育としての日本語教育に取り組んでいる<sup>(48)</sup>。日本語教育は、多く「外国人」を対象とするにもかかわらず、差別に関する問題はタブーとなりがちである。それでも、Zarate (2001: 153) の言うように、外国人嫌悪や排斥の現実について積極的に認識しようとする態度を養うことが言語教師にとっての高優先事項の一つであるとすれば、日本語教師もこの問題を避けて通ってはならない。そしてまずは、問題の現状認識から始めなければならない。

次例31のやりとりの中で、Aは蔑称としての認識が広まっている「外人」という言葉を使用し、その「外人」を「お前ら」と呼んでいる。「日本の文化は日本人にしか理解でき」ず、それゆえに「外人」に「日本のよさが理解できるはずがない」のだから、「引っ込んでろ」という構成である。

例31

- A…日本の文化は日本人にしか理解できない。いちいち外人の評価に一喜一憂せず我々の文化に親しんでいけば、それでよし。外人は日本に来るな。お前らなんか日本によさが理解できるはずがない。引っ込んでろ。
- B…てめえこそナニ人だか知らんが引っ込んでろやカス！ 甘ったれてんじゃねえぞコラボケ！

A…おーこわ。純潔日本人ですが何か？ 甘ったれてる？ 何を？（笑）君は汚い暴言吐いて何怒ってるんですか？ もしかして×××ですか？ 何故日本人は海外で評価を受けて、それに喜んでるんだらう？ もっと自信と余裕を持つべきだ。いちいち気にしなくていいんだよ。ところで、君は「ナニ人」なんでしょうか？（笑）

BはAのコメント内容に反対しているが、その反対の根拠は明示されていない。ただ、Aの発言の正当性を揺るがそうとした部分があるとすれば、それは「てめえこそナニ人だか知らんが」の部分であると思われる。Aはむしろ、第一コメントでの「我々の文化」＝「日本の文化」という括りや、「外人は日本に来るな」の「来る」に見られる視点から、「日本人」として自らを構成している。したがってBのコメントは、Aが第一コメントで形成したA＝「日本人」の結びつきに疑義を呈したということになる。

それに対するAの返答は、自らを「純潔日本人」と再定位した文で始まっている。Aは反対にBに対して「ナニ人」アイデンティティを問う（「もしかして×××ですか？」）ところで、君は「ナニ人」なんでしょうか）が、ここでの問いは、無論中立的なものではない。Aは「×××」に否定的な意味を付し、また「日本人」を価値づけているため、Bの「ナニ人」には「日本人」以外の答を想起させる

意図があると思われる。

次例32においても同様に、Dは自分が反対する意見を持つCに対して「なに人」の名乗り要求を行うのみならず、「日本人のふりしてコメ（引用者注：コメントの意）しないで」と、Cに偽日本人の表象を付与している。例33ではGが「Fは×××人か？」とFに特定の民族呼称を付すが、ここでこの民族呼称が肯定的な意味を持つてはいないことは、文脈から明らかだ。さらに「あなたは×××人か？」ではなく「Fは×××人か？」と第三者に問いかけているという点からは、これが例31でBがAに対して行ったのと同じく、Fの発言の正当性を揺るがそうとした言説であるものとして読み取れよう。

### 例32

- C：フランス人で日本人のこと下に見てる人いっぱいいるよね  
D：@D あんたが不細工でダサイからじゃん。あんた何人？  
日本人のふりしてコメしないでくれ。<sup>(8)</sup>  
E：日本人です。喧嘩する気ないんで。

### 例33

- F：This video is so shame.. [このビデオは恥ずかし]  
G：Is F... a xxx? [Fは×××人か?]

例34においても、Hは例31のAと同様に、まず「日本人」として自らを構成し（「日本人としては嬉しい」「日本に生まれてよかった」、その後で「そーいや」と唐突に「嫌×××」「×××国のパクリ文化は有名」「フランスには×××マニアなんていない」と×××国を否定する発言を続ける。ここでは「パクリ文化」の「×××国」が「誇れる文化」に「溢れ」ている「日本」と対照的に描き出される。

それに対して、Iが「やめてください」と止めた。Iは、Hのようなことを言う日本人が「一人でもいる」のなら、「日本は最低」だ、と述べる。Hは返答を返していないが、新たに、Jがそこに「×××はだまつてる」と返信をつける。

### 例34

- H：ジャパンマニアかあ……日本人としては嬉しいけど、何かすぐつたいカンジ。こんな誇れる文化に溢れる日本に生まれてよかった！……そーいや、ジャパンエキスポには×××国も参加してるよね。私、嫌×××だからジャパンエキスポには出でほしくないんだよね。×××国のパクリ文化は有名みたいだし……それに、フランスには×××マニアなんていないでしょ？  
I：Hさん✓「それに、フランスには×××マニアなんていないでしょ?」<sup>(9)</sup>

やめてください。そんな事を平気で言う日本人が一人でもいるのなら理由は知りませんが、あなたの嫌う×××国よりも日本は最低だと思っただけです……。

J・×××人はだまってる。本当の事を言っただけだろ。

以上、例31―34のコメント群に共通する特徴として、他者への否定が「なに人」への帰属と結びつけられていたこと、また反対に否定したい他者を特定の国籍や民族と結びつけていたこと、そして特定の国籍を持っていたり、特定の民族集団の中にいる人間を総体として否定していたことが挙げられる。例34中のIは、Hの人種主義的な発言に対して反論しているが、その反論の構造も、「そんな事を平気で言う日本人が一人でもいるのなら」「日本は最低」という一事が万事的なものであり、「日本」を一塊のものとして捉えている点では、×××国全否定の形をとったHのコメントと共通した論理構成になってしまっている。

#### 九―四 他者否定のコメントにおける使用言語の問題

最後に、他者否定のコメントにおける使用言語の問題について検討したい。既に述べた通り、本稿で分析対象としたコメント群は日・仏・英を中心とする多言語で記されているが、連続的な最も長いやりとりの連鎖は、次の英語でのコメントを発端としていた。そ

こでは、連続するコメントのいずれも他者否定の要素を持っている。発端となった次のコメントにおいては、コメント提供者が自身を「×××人」として構成した。このコメントにおいては「日本人」こそが他者であって、誹謗中傷の対象である。以下に引用するコメントにおいては、幾つかの企業名・個人名が出てくるが、▲▲として伏す。

ただし、第三者的な意味づけで提出されているオーストラリア・アメリカの両国に関しては、原文のままに残した。

例35 I am in Australia and I dont see any Japanese TV that are selling xxx ▲▲ and ▲▲ TV are only TV makers that can make (...) xxx suppresses Japan in every industry and business sector. and whole world like xxx. and they dislike Japan. haha oh they only like sushi. because it is cheap. [自分はオーストラリアにいる。自分は日本のテレビをここで見かけない。売られているのは×××の▲▲や▲▲のものばかりで、▲▲や▲▲だけが… (中略) …といった製品を作れる。×××はあらゆる工業・商業分野で日本を追い抜きつつある。世界全体は×××が好きで、日本は嫌いだ。彼等は寿司が好きなんだ。安いから。]

このコメントは次に引用する例36―38に代表される反応を引き起



であり、Xの側からも靖国神社への言及を含む次の再反論があつて、やりとりは長く続く。

例40 xxx may have narcissism but at least we dont not provoke other Asian nation by visiting a Place such as Yasukuni (WW2 ciriminal memorial place). [×××はナルシズムを持って いるかもしれない。だが少なくとも、我々は他のアジアの国を、靖国 (第二次世界大戦の戦犯を祀るところ) のような場所を訪問して 挑発したりはしない。]

ここで、このやりとりにおける使用言語に注目したい。Xのこのコメント(例40)を発端とするやりとりは、以降十七コメントにおいて継続したが、やりとりが双方向的に(相互否定的に)続いていたのは、それが英語で交わされていた間だけであつた。この長いやりとりの連鎖は、コメントに日本語が入り、なおかつそれが複数続いた時点で終了した。やりとりが続いている間、使用言語として英語が堅持されていたことは注目に値する。なおかつ、誤用の多さから見れば、やりとり参加者の誰にとつても、英語は第二言語／外語学習言語であるように思われる。ならば逆説的ではあるが、双方とも英語を学習していたからこそ、これだけの——傷をつけあい、溝を深めるようなやりとりが可能であつたということになるのではな

いか。Xに日本語が理解できないとすれば(Xが日本語を理解できることを証拠づけるコメントは見られなかった)、応えようがないからである。

対照的なことには、同じく「日本」に対して全否定的なコメントであつても、次例に対しては何の反応も見られなかった。刺激的かつ日本に対する徹底的な否定という意味ではXのコメントを上回るだろう次のメッセージに対して何の反論も提出されなかった最大の理由は、これが中国語で記されていた点にあると思われる。

例41 日本的天皇投降而不自杀：为了活命自称凡人：真是丢人：日本已经亡国：日本人就是美国的亡国奴隶：日本再也不会有一战前的国际地位：日本也不能摆脱美国人的控制：将来时代人口多了，美国白人就来个种族隔离政策：到那时日本人就知道×××是多么的自由和幸福：到那时美国会借口日本人基因有问题而加以限制和隔离：日本人只能过下等人的生活：最后慢慢人口减少，直到消亡：(日本の天皇は投降したのに自殺しなかった。生き延びるために自分は人間だと称した。本当に情けない。日本はすでに亡国だ。日本人はアメリカの亡国奴隷だ。日本はもう二度と第二次世界大戦前の国際的地位を得ることはない。アメリカの支配を逃れることもできない。将来人口が多くなったらアメリカの白人は人種隔離の政策をとるだろう。その時日本人は×××がどれだけ自由で幸

福かを知ることになる。その時にはアメリカは日本人には遣伝子に問題があると理由をつけ制限を加え、隔離するだろう。日本人は下等人としての生活を送ることしかできず、だんだんと人口が減って、消滅するだろう。」

このコメントに対する無反応は、Xのコメントを発端に、相互否定的なものではあれど長い連鎖が生み出された要因に英語使用があつたことを裏付ける。

そしてもう一点、Xのコメントに注目すべき点があるとすれば、それは、Xが英語を読める第三者である観衆の存在を意識している点であろう。Xの以下のコメントのYasukuniに注目したい。XはYasukuniの後に( ) 書かれ、WW2 criminal memorial place (第二次世界大戦の戦犯を祀るところ)と注釈を加えている。

例42 xxx may have narricism but at least we dont not provoke other Asian nation by visiting a Place such as Yasukuni (WW2 criminal memorial place) [×××はナルシズムを持っているかもしれない。だが少なくとも、我々は他のアジアの国を、靖国(第二次世界大戦の戦犯を祀るところ)のような場所を訪問して挑発したりはしない。]

この注釈部分は、誰に向けたものか。コメント全体としては、Xが相手としている「日本人」コメント挿入者を宛名としたものであるはずだ。だが、この注釈部分に限っていえば、その宛名は、英語を読める多数の第三者であると考えられる。なぜなら、Xの相手は「日本人」として自己構成しており、であるならば、靖国という名前を知らないということは考えにくいからだ。なおかつ、Xが靖国の意味づけを争う——たとえば、そこに祀られているのは「戦犯」とするか「英霊」とするか——つもりであるならば、注釈の中に入る必要はない。

したがって、この注釈の目的は、靖国の意味づけを争うことではないだろう。( ) に入れられたこの注釈は、第三者たる英語理解能力のある観衆に対して、WW2 criminal memorial place を訪問しアジアの他国を「挑発」する日本の非を鳴らすために機能する。

#### 十 J P C を巡って交錯する／せめぎあう境界

本稿では、第一に、日本政府がJ P Cをどのように位置づけているのかということを記述した。第二にはフランスのルポルタージュ番組 \* Plusieurs portraits de Japan-maniac \* (日本マニアの幾つかの肖像) において、第三にはそのルポルタージュに寄せられた匿名のコメント群において、J P Cがどのような枠組みに結び付けられ、

JPCを巡ってどのような線引きがあったのかを描き出した。

第一の日本政府のレベルでは、JPCは日本文化という上位概念に内包される一部であり、その人気は「日本」の理解者とファンを増やすため」に有効だと考えられていた。

しかし、第二のルポルターージュ内では、若者による日本への情熱ばかりでなく大人たちによる反対という文脈が導入された点で、またJPCに焦点化された日本への肯定とアジアへの肯定が矛盾なく両立していた点で、日本政府レベルの境界設定とは異なっていた。つまりルポルターージュにおいても、漫画・アニメと日本とは切り離せないものとして扱われていたが、必ずしもそれは、日本が政府政策レベルで主張するような繋がり方ではなく、またアジアという枠組みもJPCへの嗜好と矛盾しない形で提出されていた。

一方、第三の匿名コメント群では、日本の政策レベルよりも、またルポルターージュ内で描かれたよりも多様な境界が導入され、第二のルポルターージュ・レベルで敷かれた境界設定を変形したり、強化したり、逆転させたりしていた。具体的には、JPCの帰属を巡って、日本とJPCとを引き離そうとしたり、あるいは日本とアジアや、日本とアジア内他国を対立させるような境界設定が見られた。

そのようなコメント群における他者への否定は、頻繁に特定の国籍や民族集団と結びつけられていた。

人間の歴史とは、より遠い他者へ——より知らない他者へとコ

ミュニケーションを拡張していく過程だったのかもしれない。そして今、本稿で見えてきたのは、メディアを通して知らない他者と日常的に向かいあい、時に互いの名も知らないまま、自らのアイデンティティのうち「〇〇国人」という部分を押し出している姿である。個人のレベルで、国家という境界が前景化されている。船曳(2003: 33)は、「日本人」は、国家に積分されるのではなく、個人に微分されつつある」と記している。船曳のいう意味合いとはやや異なるかもしれないが、本稿九—二から九—四で見えてきたようなやりとりは、まさに個人に微分された、ナショナル・アイデンティティの表出であったとも言えるだろう。

すでに述べたように、筆者の仕事は、第二言語／外語としての日本語を教えることだ。その立場から見るとき、とりわけ九—四「他者否定のコメントにおける使用言語の問題」は大きな意味を持っている。

九—四では、他者否定の言説における使用言語の問題として、媒介語として英語があったからこそ、連続的な相互否定のコメントが大量生産されたと考えられることを述べた。また、英語コメントの中に、否定しあう双方のいずれでもない第三者へ向けられたメッセージがあったことを指摘した。

このことから、言語習得は、人と人とを結ぶ「絆」として役立つばかりではないということが言えてしまう。学びさえすれば良いの

ではない。時に、学んだ言葉は他者を攻撃する武器になり、他者を自らから引き剥がし境界を築く。

もちろん、筆者は、言語学習など不要で、それぞれが共同体の内部に閉じられた言葉を話していれば良いといった主張をしたいわけではない。

言葉を学ぶ／教えることそのものの否定ではなく、何のために学ぶ／教えるのかという見直しが必要であると思う。現在の日本での「国語」をのぞく言語教育では、言語＝ツール観が主流だ。<sup>(1)</sup>だが、国籍や民族という個人には動かし難いものを基準として、知らない他者を否定する／知らない他者に否定されるという有様とそこでの言語使用を見たとき、「使えるようになる」「言いたいことを言えるようになる」ことばかりを重視した言語学習／教育の問題点が迫ってくるのではないか。

もつとも、本稿は、フランスで放送された一ルポルタージュに対するインターネット上でのコメント群を分析対象としたものであって、その点に限界がある。今後、より有効な主張をしていくためには、アジアや南米など他地域での関連番組に対するコメント群を分析したり、フィールドワークを併用するなどして、より多角的な視野から交錯する／せめぎあう境界の様相を理解する必要があると考えている。

#### 注

- (1) この定義は、後述する外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) の「ポップカルチャーの文化外交における活用」に関する報告」による。
- (2) そのフランスにおける例が、四一七節にかけて示される。
- (3) なお、フランスの場合は一九七四年に「リボンの騎士 (Princesse Saphir)」が放送されたのが最も早い。しかしファンが激増したのは一九七八年の「U F O ロボ グレンダイザー (Goldrake)」以降のことである。
- (4) 二〇〇二年の施政方針演説で、当時の小泉純一郎総理が「研究活動や創造活動の成果を、知的財産として、戦略的に保護・活用し、我が国産業の国際競争力を強化することを国家の目標とします」と述べたことを受けて、同年十二月四日に知的財産基本法が成立した。知的財産戦略会議および本部の設置はこの法律に基づいている。
- (5) 首相官邸のウェブサイトにある、知的財産戦略本部のトップページより。
- (6) 知的財産戦略本部 (2010:10) による。
- (7) 知的財産戦略本部コンテンツ専門調査会 (2003:12) による。
- (8) 外務省の海外交流審議会は、二〇〇二年十月からは「外務省の領事改革及び外国人問題」をテーマとして審議を行い、二〇〇四年十月に「変化する世界における領事改革と外国人問題への新たな取り組み」を答申した。「我が国の発信力強化のための施策と体制」をテーマとしたのは、その後のことである。
- (9) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (10) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (11) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (12) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。



- (13) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (14) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (15) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (16) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (17) 外務省海外交流審議会 (2008: 14) による。
- (18) 国土交通省総合政策局 (2007) による。
- (19) 日本貿易振興機構市場開拓部 (2005: 3) による。
- (20) この規定の施行は一九八三年からである。
- (21) 無論「国境のない」のはEU域内のみであり、外部に位置する日本にとってEUの壁は厚い。
- (22) 日本貿易振興機構市場開拓部 (2005: 8) による。
- (23) 日本貿易振興機構市場開拓部 (2005: 19) による。
- (24) 日本貿易振興機構市場開拓部 (2005: 19) による。
- (25) 日本貿易振興機構 (2009: 74) による。
- (26) この数字は主催者側発表 (SEFA EVENT 2009) による。
- (27) この数字は主催者側発表 (SEFA EVENT 2011) によるが、同社は「(この)数字は非公式のもので、正式な数字は後日発表され」としている。
- (28) フランスはまた、ヨーロッパでも最も日本語学習者の多い国でもある。国際交流基金 (2006) によると、フランスの日本語学習者は、二〇〇六年の調査時点で八四五一名である。このような多数の日本語学習者の理由としては、JPC人気が大きき理由として指摘されるところであり、フランスの学習者に関しては、たとえば近藤・村中 (2010) の調査が「ポップカルチャーに関心が強い未習者の方が日本語学習への関心が強い傾向にある」ことや「学習目標設定にはポップカルチャーに関連のあるコンテンツが基準となる傾向がある」ことを報告している。
- (29) 一九九六年十二月号には、Pascal Lardelier による署名記事 \* Ce

- que nous disent les mangas... \* が載り、それに対する読者からの多くの投書が翌一九九七年三月号で \* Il y a mangas et mangas \* として掲載された。二〇〇一年十月号の Philippe Pons による署名記事 \* Le négationisme dans les mangas \* では、首相による靖国参拝問題と絡め、アジアの政情に漫画がどのように関係しているかということが分析された。
- (30) この番組は、二〇〇〇年に良質な情報を提供していると Sept Dior 賞を受けている。
- (31) 以下、本節内における「」内の言葉は、特記のない限り、八節に後述する日本語幕版から引用したものである。
- (32) スイカの言葉の最後の部分は、日本語字幕版では「何度もサタンって呼ばれたものよ」と Satan の訳語がカタカナになっているが、ここでは後述される「天使」にあわせ、漢字で「悪魔」とした。
- (33) 外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) による。
- (34) フランス語版も日本語字幕版も、正規の著作権保持者がアップロードしたようには思われない。ゆえにここにインターネット上のアドレスを記すことはしない。そのようなビデオを扱うことに躊躇いはあったが、同様の情報は実際に大量に流れていること、後述するような問題性を含んでいることから、本稿では学問的分析の対象とした。
- (35) 正確には、一、五〇〇、六二六回であった。
- (36) 「スパムとして報告されました」と表示の出ているコメントは計算に入れなかった。
- (37) 厳密には、IPアドレスからコメント投稿者を突き止めることは不可能ではないが、現実的にそれが行われる可能性は非常に低い。
- (38) 全体で一〇〇%にならないのは、すぐ後に述べているように、コメント内で複数の言語を使用しているコメントが約八%見られたからである。

(39) なお、本稿分析データが投稿されたYouTubeでは、コメントは動画の下に、コメント投稿の時系列に沿った一覧の形で並ぶ。コメントが動画内のどの特定の部分に対して付されたものであるのかということは、コメント記入者本人が注記しない限りわからないため、コメントは、動画全体への感想という性質を持つことが多い。その一方で、ユーザー名の名指しによって、コメント同士でのやりとりは行われやすくなるという特徴がある。

(40) フーコー(1982:119)は、「権力」という語によってまず理解すべきだと思われるのは、無数の力関係であり、それらが行使される領域に内在的で、かつそれらの組織の構成要素であるようなものだ。絶えざる闘争と衝突によって、それらを変形し、強化し、逆転させる勝負ゲームである」と記している。本稿筆者は、JPCをめぐる境界の線引き争いを、境界設定権の奪取をめぐる無数の力関係であると捉えているため、フーコーのこのような「権力」定義に賛同し引用した。ただし本文中では、この表現に「ルポルターージュ内」で設定された枠組み」において、という限定を加えた。

(41) 字幕では「時間が後退しているようです」と訳されていたが、前述の通り、文脈を考えれば「(時間が)後退」よりもむしろ「(精神的な)退行」と訳されるべき箇所である。

(42) その多くはフランス語であったが、中には「日本のことに興味を持つ外国人」の立場に立ち、日本語で次のように抗弁したものもあった。「このビデオを見る日本の方に分かって欲しいことがあるのですが。日本のことに興味を持つ外国人たちは、彼らのようにアニメが好きなおタクだけではありません。実は伝統の文化や現代美術などが好きな人々も多くて、こういうオタクではない人のほうが数多くだと思います。」

(43) 使用言語がフランス語に限定されたコメント内容としては、他に、番組内でフランスの若者が使用していた日本語に対する批判がある。ル

ポルターージュの中で「Comment tu désignerais ton look ?」(あなたのファッションを言葉で表すなら?) という質問に対して、スイカは「かわいい」と日本語で応じた。シユウもまた、自分の好きな服装である「ゴシックロリータ」を「mélange du côté Kawaii et du côté sombre」(かわいさと、ダークな感じが混ぜ合わさったようなもの)と説明する。「Kawaii/可愛い」はまた、全コメントの中で、最も頻繁に使用された形容詞でもある。ところが、日本語コメントの中の「Kawaii/可愛い」と、フランス語コメントの中の「Kawaii/可愛い」には、次のような差異が見られた。日本語コメントでの「Kawaii/可愛い」は、ルポルターージュに登場する少女達が可愛い、というものが主体である。たとえば「服装が超かわいいー」「まじかわいいね」「かわいいじゃんー」あるいは拡張・範疇化して「フランスの娘はかわいい。本当に美しい」といったものも見られた。ところが、フランス語のコメントでは、「Kawaii/可愛い」はまず、発音の問題として受け取られていた。「Kawaii」の発音に問題がある」と指摘糾弾する以下のようなタイプのコメントは、日本語コメントには見られなかったものである。

▶ Raah elles prononcent mal kawaii !! (あーっ、彼女たちのカワイイの発音悪すぎ!!!)

▶ Ouch, c'est Kawéee, sa manière de prononcer Kawai. (っわ、彼女のカワイイの発音って、カウエーになってる?)

▶ moi aussi son "kawai" ma stressé (そーなんだよ。私もあの「カワイイ」にいらつくんだよね。)

▶ je pense que c'est un abus volontaire... Elles sont loin d'être les seules à prononcer kawaii de cette façon en France. (わざとやっているんだと思うよ。フランスでカワイイをそんな風に発音する人多いからよ。)

▶ On ne dit pas kawa aiei mais ka wa i comme un i. (カワイイって言

わないよ！ かわいだよ。iがつくんだよ。」

(44) 「何でだろ」の後ろにある「・・」ε・・」は、インターネット上で頻繁に用いられる顔文字の一つであり、ε記号が鼻を表している。

(45) このコメントの末尾にあるwもインターネット上で頻繁に用いられる記号であり、笑いを表す。

(46) たとえば蜷川 (2010) や萩上 (2007) など。

(47) 本稿が「入れ知恵」を行って差別的・侮蔑的表現を増やす契機になってしまうとしたら、それはとても残念だ。だが、それでも、冷静な分析はその増殖を止めることにも、貢献できはしまいかと思う。

(48) 「外語」は「外国語」のタイプミスではない。外国語に対して母語という表現があるのと同様、外国語に対して外語という表現があるべきだと筆者は考える。外語とは、「自分のものでなく、馴染みのなく、関係が薄く共有するものの少ない言語」である。詳しくは山本 (2010) を参照されたい。

(49) @は、宛名を表すインターネット上のジャルゴンである。

(50) Iの発言冒頭に「Hさん」とあるが、これはこの発言がHを宛名として指す。I自身が入れていたものである。

(51) たとえば文部科学省は二〇〇二年に「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想」をとりまとめている。そこでは、言語は、単純に意志伝達の手段でしかない。

#### 参考文献

- 赤坂憲雄 (2002) 『境界の発生』 講談社  
 伊地知晋一 (2007) 『ブログ炎上——Web2.0時代のリスクとチャンス』 アスキービジネス  
 岩淵功一 (2007) 『文化の対話力——ソフト・パワーとブランド・ナショナルリズムを越えて』 日本経済新聞出版社

岩淵功一 (2009) 「グローバル化とメディア文化再考」『放送メディア研究』 六、日本文化協会放送文化研究所、七—三二頁

萩上チキ (2007) 『ウェブ炎上——ネット群集の暴走と可能性』 筑摩書房

外務省海外交流審議会 (2008) 「我が国の発信力強化のための施策と体制

——「日本」の理解者とファンを増やすために」 ([http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shingikai/koryu/toshin\\_ts\\_k.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shingikai/koryu/toshin_ts_k.html)) 二〇一〇年一月九日検索

外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会 (2006) 「ポップカルチャーの文化外交における活用」に関する報告」 ([http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shingikai/koryu/h18\\_sokai/05hokoku.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shingikai/koryu/h18_sokai/05hokoku.html)) 二〇一〇年一月九日検索

国際交流基金 (2006) 『海外の日本語教育の現状——日本語教育機関調査 2006年 改訂版』 国際交流基金

国土交通省総合政策局 (2007) 「日本のアニメを活用した国際観光交流等の拡大による地域活性化調査報告書」 (<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatsu/h18seika/01anime/01anime.html>) 二〇一二年一月九日検索

近藤裕美子・村中雅子 (2010) 「日本のポップカルチャー・ファンは潜在的日本語学習者といえるか」『国際交流基金日本語教育紀要』 六号、国際交流基金

櫻井孝昌 (2009A) 『世界カワイイ革命——なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』 PHP新書

櫻井孝昌 (2009B) 『アニメ文化外交』 筑摩書房

田中克彦 (2001) 『差別語から入る言語学入門』 明石書店

知的財産戦略本部 (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeiki2/>) 二〇一〇年一月九日検索

知的財産戦略本部 (2010) 「知的財産推進計画2010」 (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeiki2/>) 二〇一〇年一月九日検索

